

紙版 **ハコブネ×ブックス** vol.23

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐwebサイトです。



てのひらに未来

作者 工藤純子
出版社 くもん出版
発行 2020年2月
ISBN 978-4774330549

review



金属部品の加工をする町工場の娘である中学生の琴葉は、ある夜、月のない空に隕石が大気圏突入の際に発光する現象を目撃します。それは琴葉に「Jアラート」の強烈な警戒音の記憶を呼び覚まします。頻繁にミサイルが日本の排他的経済水域に撃ち込まれた時の恐怖感。まだ遠い場所にある戦争を琴葉は俄かに感じ取ります。武器の製作の注文を断った父親と、ミサイルへの恐怖から武器を作ることで国を守るのではないかと考える琴葉。父親の選択について思い悩む琴葉は、工場に住み込みで働いている少年、天馬との関わりの中で、父親の仕事への矜持や、過去の戦争で傷ついた気持ちを抱えたまま現在を生きている人たちの心情を知ります。中学生の「てのひらには大きく重すぎるもの」を、この先にある未来のために琴葉は受けとめて考えていきます。

特集

新感覚戦争児童文学

祖父母ですら戦争を経験したことがない、というのが、現代の子どもたち世代です。戦争に対する感度も鈍化しているのではないかと思われがちですが、姿の見えない危うさを感じ取っている子どもたちもまたいるはず。一見、平和な現代の日本にも、あの戦争の時代の影響が見え隠れしています。かつて焼け跡のゼロ地点から傷ついた心が復興していく物語が数多く描かれました。今、戦争を描く物語は、現在を起点として、過去と未来を繋いでいきます。思わぬ題材や新しい手法が、目の前にありながら見えていかなかったものを浮かび上がらせています。今回、紹介するのは、いずれも新しい感覚で戦争を描いた物語です。現代の日本にもまた戦争の影は兆しています。静かに忍び寄ってくる脅威と闘うために、まずは意識することが大切です。物語にこめられた平和への祈りを鋭敏な心の感度で受けとめてください。



零から0へ

作者 まはら三桃
出版社 ポプラ社
発行 2021年1月
ISBN 978-4591169070

review



昭和二十年の初冬。戦死した父親に代わり家族の生活を支えるため、入学したばかりの大学を辞めて仕事を探していた松岡聡一は、運輸省の鉄道総局に採用されます。職場となったのは鉄道技術研究所。ここでは、時速二〇〇キロを出し、東京から大阪まで四時間半で到達する超特急の開発が計画されていました。聡一は戦時中に軍で兵器開発に携わっていた技術者たちの下働きをするようになり、その厳しい指示に音を上げつつも研鑽を積んでいきます。当時の電車の最高時速の倍以上の速度を出す車両を作るという計画は、途方もないものでしたが、軍出身の技術者たちは、戦時中に多くの命を失わせてきたことへの贖罪として平和のために自分たちの力を使いたいという鉄の意思を抱いていました。聡一もまたその姿に感化され、夢の超特急、新幹線の実現に力を尽くします。



ある晴れた夏の朝

作者 小手鞠るい
出版社 講談社
発行 2018年7月
ISBN 978-4036432004

review



ニューヨーク州の小さな町のコミユニケーションセンターで行われた討論会。それはハイスクールの生徒たちが、原爆投下は正しかったのか、肯定派と否定派に分かれて議論し勝敗を決するデベート大会でした。メイが原爆否定派のメンバーに誘われたのは、母親が日本人だからです。一方で肯定派には両親ともに日系二世であるケンもいます。大量虐殺である原爆の非を前提としつつも、原爆は戦争を終結させる手段としての必要悪だったと認めるべきか。原爆が投下されたのは日本軍の残虐行為への当然の報いなのか。あるいは戦後の世界情勢を見据えてのアメリカ力が威勢を見せるための牽制に過ぎなかったのか。議論を重ねる高校生たちがそれぞれの、真摯で実直な心情が垣間見えます。論理的であることを求めながらも、論理だけでは計れないものにつき動かされていく気持ちこそが魅力的な物語です。



パウムクーヘンとヒロシマ

ドイツ人捕虜ユーハイムの物語

作者 巢山ひろみ
翻訳者 くもん出版
発行 2020年6月
ISBN 978-4774330570

review



広島市に住む小学六年生の颯汰が参加した夏休みキャンプは、日本にはじめてパウムクーヘンを伝えたカール・ユーハイムさんと同じレシピでパウムクーヘンを作るという魅力的な企画でした。颯汰はそこでドイツで生まれ育ったユーハイムさんがどうして広島にきたのかを知ります。第一次世界大戦当時、ドイツ人捕虜として日本に連行された菓子職人のユーハイムさんは、捕虜生活を経て、休戦後の日独親善の作品展覧会で広島市の物産陳列館で本場のパウムクーヘンを披露します。その場所こそ後に原爆ドームと呼ばれる建物でした。日本で菓子職人として働きながらも激しくなっていく戦争の中で、次第に追いつめられ、お菓子は平和な時にしか作れないのかと嘆いたユーハイムさんの想いと、原爆で亡くなった颯汰の曾祖父の物語が交錯していく平和を訴える物語です。

特集
新感覚戦争児童文学



金色の流れの中で
(中村真理子)
新日本出版社 2016年

一九六四年。戦時中、大陸で中国人の首を刎ねたことを夕食時に何気なく口にする父親に、六年生の木綿子は衝撃を受けます。悩める木綿子が、話し相手に選んだのは、川沿いの橋の下に住む不思議な男性でした。この時代人間ではない彼から与えられた警告を胸に刻みます。これまでの戦争児童文学を越えた物語の試みがここにあります。

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.23

2021年8月1日発行 ● 発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト「ハコブネ×ブックス」(非営利)を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。



Twitter
連携しています。

@tomoostretch